

夢の砂漠を走る

text by Shinji Ishii
文いししんじ

ダカールという地名は、多くのひとにとって二重のイメージを含んでいる。

地図上のダカールは、アフリカ西海岸の国セネガルの首都の、海に突きだした突端にある。フランス語を公用語とする、イスラムの土地。サハラ砂漠をさまよいながら、遊牧民は歌をうたう。西の海で小舟から網をうつ漁師たちは、強い陽ざしのもと白い歯をみせて笑っている。

もうひとつのダカールは、地図上にない。モータースポーツファンの記憶と、共通の夢のなかに漂っている。昔、パリ・ダカールラリー、という過酷な自動車競技があった。元日の朝パリを出発し、スペインのバルセロナに到着すると船でアフリカに渡り、そこから砂漠を南下、さきほど触れたセネガルのダカールまで、二週間をかけてたどりつく。リタイ

いや、そうでない、ドライバーたちは夢のなかを走る。砂漠の夢、西アフリカの夢のなかを。だから、「ダカールラリー」が走られているかぎり、そこにはまちががなく、夢のダカールがあらわれるのだ。

今年も走られている。1月8日、ベルーの首都リマがスタート。サハラから、テロリストの影を抜いたような、平穏かつ雄大な砂漠のただなかを、豆粒のような車体が猛然とつっぱしる。日本からはワークスとして、バイク部門にホンダ、二輪車部門にトヨタ、そして「カミオン」つまりトラック部門に、日野の2台がエントリーしていることなど、ネット広告の会社でキーボード打っている若社員は知らないだろうし、公園の広場でポケモンを追いかけている親子も知らないだろう。

日野レンジャーの1号車、2号車は、チームスガワラ、と呼ばれ、菅原父子がステアリングを握るのだが、1号車の父、菅原義正は昭和16年生まれ、今回のスタート時には76歳になっており、ダカールラリー史上最長の30年連続完走記録をもっている。まさにトラックの王様だ。

ア率が異様に高く、ドライバーが途中でクルマを盗まれたり、タイヤが地雷を踏んでドライバーが爆死したり、テロリストに狙撃されたりと、ほかのモータースポーツでは考えられない波乱、困難にみちている。

だからこそ人気があった。2000年前後には三菱パジェロが最強のクルマで、しばしば日本人が総合優勝を飾ったから、当時は、そのへんの喫茶店のおばちゃんから、「しんちゃん、今年のパリダカ、篠塚はいつものへんにいたはるん？」なんて訊ねられたものだった。

なにしろ創始者のティエリー・サビースがかっこよかった。もともとフランス人のオートバイレーサー。1978年、29歳の彼がまわりのレース仲間、「パリからダカールまで競走しよう！」

ハイブリッドから電気自動車、自動運転などの技術が、次々と乗用車に備わり、自動車の意味事態が変わりつつある今だからこそ、ダカールラリーを見ることは大切なのではないだろうか。なぜこのひとは、ここまでして走るのか。灼熱の下、砂に飲まれ、汗と涙にまみれて。そうして最終日、ゴールのコルドバに入城してきたとき、ドライバーたちの目にはいったいなが映っているか。

F1は巨大なマネーゲームと化し、ルマンなど耐久レースのサーキットからも、ポルシェ、アウディら、王者たちがつきつきと背を向けて撤退した(彼らの行き先は、フォー

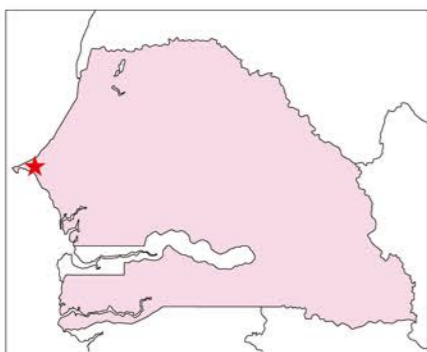
と呼びかけ、その声につきつきと、頭のねじがどうかなったような男たちが歓声と挙手でこたえ、そうしてはじまったのが「パリダカ」だったのだ(サビースも1986年事故で亡くなった)。

それが、2008年、あまりの危険性、また、途中で通過するモータリニアの政情悪化から、スタートの前日、コース全体の走行禁止が宣言された。事実上の中止だ。

けれども、頭のねじがふっとんだ男たち、女たちはあきらめなかった。アフリカがダメなら、南米にいっきゃあ、北から南へえんえんおりにいくラリーは、いくらでもできるじゃないか！2009年2月、アルゼンチンとチリを舞台に、ラリーは復活した。イベントの名称は、そこに、セネガルもサハラ砂漠もありはしないのに、「ダカールラリー」とされた。

ミュラE、「電気自動車によるF1」だ。

道の続く限り走る。道がなくとも、走りつづけたそのあとがきつと道になること。人間にとって、商売やお金は大事だが、ひととして「ほんとうに」生き、また「ほんとうに」死ぬためには、目にはみえない、より大切なものが、からだの奥底で燃えていないとならない。こんなことばを、ダカールラリーのドライバーたちはきつと陽気に笑い飛ばすだろう。何いつてるんだと。とつくに知っているよと。ねじのゆるんだやつらが78年に南に向かって走りだしたときから、全員、そんな風になし生きちゃいないんだよ、と。



セネガル共和国

面積: 197,161km²
(日本の約半分)
首都: ダカール(Dakar)
人口: 1,541万人(2016年,世銀)
言語: フランス語(公用語), ウォロフ語など各民族語
宗教: イスラム教95%, キリスト教5%, 伝統的宗教

Profile

1966年大阪生まれ。京都在住。著書に小説「ぶらんこ乗り」「麦ふみクーツエ」「ポーの話」「みずうみ」「四とそれ以上の国」など、エッセイ「人生を救え!」(町田康共著)「熊にみえて熊じゃない!」「選い足の話」、絵本に「赤ずきん」(ほしよりこ絵)など多数。

